

皇天四時を平分す 竊かに獨り此の廩秋を悲しむ

▼四章

皇天淫溢而秋霖兮 后土何時而得乾

皇天淫溢して秋霖す。后土何れの時にか乾くを得ん

更に、この作品全体に視点を移すと、(以下全釈漢文大系本『文選』「九辯五首」「要旨」を引用する)第一章は、「草木の揺落する悲愁の秋の気の中、流謫の旅にあつて孤独寂寥の感興を起す」、第二章は「忠誠の思いも空しく、かえつて君から遠ざけられ追放されるに至つたことを追懐しつつ、我が身の不遇を嘆き悲しむ」、第三章は「秋から冬へと季節は推移し、万物の凋落に心は傷み悲しむ。これにも似た我が身の境遇を思つて憂愁の情に閉ざされる」、第四章は「君を思い慕う心はなお強く、今一度、事の是非を明らかにして我が誠心を君に伝えたいと念じたが、その手立ても阻まれて、ただ嘆息するだけである。」、そして第五章は「時俗の人は小利口に立ち回り、立派な賢者は世に容れられない。君に期待をかけたつても、不遇の我が身を思つて限らない悲哀感を抱く」と締める内容である。この作者である宋玉が屈原に仮託して、楚の懷王を想う心情を、道真に移すと、左遷の宣命を出した醍醐天皇、それを阻止しようとした宇多法王を想うそれと酷似していることに気付く。不本意な太宰府左遷、無実の心情を伝える術のない絶望的状况にあつたであろう道真に、この宋玉の「九辯五首」は、どれほど心の支えになつたか想像に難くない、まさしく道真自身の今の心情の代弁ともなっているこの作品を「皇天」という共通の詩語を使って、この道真の詩を読むものに想起させるという構造になつてゐる所を見逃してはなるまい。

(焼山 廣志)